
普通じゃない生徒たちの密約と冒険～僕らは普通でないことが嬉しい～

カーレンベルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通じゃない生徒たちの密約と冒険〜僕らは普通でないことが嬉しい〜

【Nコード】

N3233L

【作者名】

カーレンベルク

【あらすじ】

沖縄のある場所にそびえる私立、文都高校ぶんとに通う久野夕華ひさのゆづかは普通である自分に立ちを覚えていた。そんなある日、普通ではない考えを持つ男子生徒と出会う。その日から彼女の人生は変わった。

文化祭、夏休み、そして…

彼らは普通ではない行動をする。考えをする。冒険をする…。普通ではない生徒たちは、いつしか普通でない証明として、通じ合え

る仲間として密約を結んだ。僕らは普通でないことに喜びを感じるのだ。ある夏の沖縄で、少し風変わりの生徒たちの冒険が今始まる。

序章 少女にかけられた呪文（前書き）

大変お持たせしました、カーレンベルクです。個人的に好ましいジャンルでなかった場合は申し訳ありません。次回にご期待ください。

さて、今回ははじめファンタジーにしようかと迷ったのですが、前作がファンタジーだったために、同じジャンルばかり続くと読者の皆様が飽きてしまうのではないかと思い、文学に着手しました。文学と聞いただけでめまいがするような方もいらっしゃるのではないかと思います、文学にしかない深い小説の世界を楽しむ事もできるはずです。

私自身、文学作品を書くのは初めてですが、自分の中にある知識をうまく使って、なるべく読みたくなるようにつくっていきたいと思っています。今回もいつもと同じく、更新日のおおよその目安を後書きに記載しておきます。では…カーレンベルクの小説の世界をじっくりとお楽しみください。

序章 少女にかけられた呪文

彼は机に突っ伏していた。

両腕を額のところまでつけて、体を椅子に丸めてひっそりとしている様子は、まさに戦場の塹壕を思わせた。

ここは教室だ。

身を隠す場所などどこにもなく、彼はさらしものになっている自分の左の頬を夕日に照らされていた。

目の前には黒板に白いチョークで、それもかなり太めの字で、45分までに終わらせること。逃げたら逃げた日の分だけ課題を追加する。と書いてあった。

周囲には誰ひとりとして残っておらず、彼が彼自身の存在が置き去りにされたことを、この世の全ての憎悪として表現しているように私には見えた。

この手の生徒は凶暴であるかと思われるだろうが、彼は違った。

違ったというより、そもそもこういった補習という特殊な場にいる人間が普通であるわけがないと私は思っていた。

だから彼に声をかけた。

自分を変えてくれる人間が欲しかった。

普通という沼に呑まれないように救いを求めた。

半分は好奇心だった。

残りのもう半分は分からなかった。

万が一、ただ課題が面倒で寝ているだけだったのなら、適当にあしらって帰ろう。

私は彼に近づいた。

本当に眠っているのだろうか？

背中が肺の空気圧でしぼんだり膨らんだりしているのは確認できたが、肝心の反応がない。

彼の乱雑に伸びた後ろ髪が、開いている窓から入ってくる風になびき、眠りという心地よさに拍車をかけていた。

背丈は小さく、黒い制服に包まれた漆黒の腕のラインは、女性のものに見分けがつかないくらい細かった。

見た目で人を判断するなとよく言うものだが、いつもこの決まり文句をうっとおしいと思うときがある。

とくに彼を見た時、私はどうしてこんな子が、と無意識に考えていた。

考えられる理由は、おそらく勉強ができないから。

ああいう派手な格好が嫌で、なおかつ勉強ができないのかもしれない。

とにかく考えていても仕方がないから、声をかけようと彼の肩をコンコンと軽く触ってみた。

何かが私の手についた。

湿った黒髪だ。

短いからきつと彼のものだろう。

今だに反応がない彼をよく見ると、字がびっしりと埋まった答案が彼の上半身と机の間に挟まれていた。

ちよつといたずらして見てやろう。

私は紙を引き抜こうと、彼の前に出てきて、その白くどがった先っぽを引っ張った。

ビリッ、ビリビリ！

「あっ！」

彼の書いた答案用紙が、驚くほど簡単に八つ裂きになってしまった。

「う、ごめん！ 私てつきり…」

私は彼を見て声を止めた。

泣いている。

よほど頑張つて書いたのだろう。

それを私が一瞬でメチャクチャにした。

しかも単なる気まぐれで。

最低だ、自分。

彼女は地殻に眠るマグマよりも深く後悔した。

彼はまだ泣いている。

それもそのはずだ。

私は何とかして許してもらおうと頭を下げ続けた。

「本当にごめんなさい！ こんなに簡単に破れるなんて思わなかったの！」

「本当に反省しているのかい？」

泣いている割には落ちついた声で彼が話し始めた。

本当かと言われれば、それは嘘だ。

しっかりばれている。

本当は破れる以前に、見ようという心の汚れさえなければ、事件は起きなかったのだ。

私はさらに彼を怒らせたと思った。

なんて図々しいんだろう。

悪いことは悪いから、しっかり反省しようと、小学校の頃から習ってきたのに、いまだに高校生にもなってそれができないなんて、情けなさすぎる。

みんながそうだから、みんなが一緒だから、それが正しいという理由はないけれど、黙っていれば、ワカラナイ、バレナイ、オイシイトコロダケヲ、キガルニモツテイケバ、ダイジョウブ…

「私は、みんなと一緒になんて、普通になんてなりたくない。」

いつの間にか、私は自分から彼に話していた。

「こんな汚れた世界なんて、大っ嫌い。」

そうだ、自分は変わりたくてあなたに近づいた。

なのに、何をやっているのだろう？

ひよっとしたら、恐ろしいのかもしれない。

普通じゃなくなることが、恐ろしくてたまらない。

「なぜ？」

「え？」

なぜと言われたことも、なぜと考えたことも、この生活の中では不思議なことに一度もなかったのだ。

急に心から謝りたい気持ちになった。

なぜかは、これだけはいくら理由を突き詰めても分からなかった。

「ごめん、本当は、どうせバカな答えに違いないから、笑ってやろうと思った。それと、破れないから、大丈夫だと、思った…。」
笑いなさいよ。 軽蔑すればいいでしょう！」

私は後から来るであろう、彼が私をさげすむ目の衝撃に備えるため、徹底的に自暴自棄になろうとした。

だが、彼から帰ってきた言葉は…

「よかった。これで僕の仲間だね。 君は普通じゃなくなった。おめでとう。」

本当に変わったやつだった。

恨まれるどころか、さっぱりとした穏やかな口調で、おだやかな瞳で、逆に祝福までされてしまったのだ。

突如として立ち上がった彼は、勝手に私を抱いて、慰めるように背中をトントンと叩いてくれて、私は彼と同様に一滴の涙ひとしずくを流した。それは、まるでどこかの異国の文化のように軽率で、普通ではなかったが、心から相手を思わずしりとした重みがあった。

自分が親におはようも言わない態度に腹がたった。

しかし

「な、何したの？」

恋人でもない相手に抱かれて、顔を赤くした私は怒りを覚えた。

それは彼をまだひとかけらも理解していない反応だった。

「怒ってるのかい？」

「それ以外に何があるって言うの？ これは、そう、セクハラよ！」

だが、彼はクスクスと笑った。

「な、何がおかしいの？」

拳を強く握りしめて、私は怒りにわなわなとふるえていた。

今の今までそうだったのに、彼は簡単にその炎を消してみせた。

「別に。僕は僕なりにあいさつしただけだ。普通じゃないあいさつを。君はもう普通に戻りたくなっただの？」

でも…

「大丈夫。別に卑しい気持ちなんてない。嫌なら別のを考えよう。でも、礼とか握手とかはなしだ。」

心を奪われたというか、私は好意とかいうものとは別に彼を知りたくなっただけだ。

「い、いいわ。でもこれでおあいこだから、解答用紙破った件は水に流してよね？ いい？」

彼は黙って頷くと、教室の出口のところで止まって振り向いた。

「僕は木島隆平。君は？」

「あ、私は、夕華。久野夕華。」

名前など聞いてどうするのだろうか？

別のクラスだから会う機会もほとんどないし、はっきり言ってあまり近づきたくなかった。

言いかえれば普通じゃない状況に私が慣れない以上はこの男子生徒に会う勇気がなかった。

しかし、勇氣は出すものではなく、つくるものだ。この時分かった。

去り際に彼の言った一言で。

「そうそう、僕が泣いていたのは紙を破られたからじゃない。」

「え？」

「よく見てごらん。それ、僕の書いた悲劇小説だよ？ おかしな話だけどさ、自分で書いて、自分で泣いてたよ。」

だから紙は水分を含んで破れやすくなっていたのだ。

「さっきおあいこって言ったね。分かった。君さえよければいいんだ。じゃあね久野さん！」

やられた。

私は一体、何について謝っていたのだろうか？

「ちょ、ちよつと待てー！ーっ！」

勝ち逃げされた後に湧き上がるのは、嫉妬深い女性のもう一つの
闇。

「あのバカ！ 許さないんだから！」

だが、かえって気持ちがスツとした。

彼にある意味ではあるが、会いたくなつた。

会えるようになった。

私の普通ではない人生が、こうして始まつた。

面倒ほど面白いものだと、今となつては純粹に考えることができる。

心の持ちよう一つで、こんなに世界は私唯一の個人的な創造物となるのか。

私は自分が普通ではないということを誇りに思う。

自分が異常者と言われようが、なんでもない。

あの夏にやったことの全てが、普通でないときよりもはるかに輝いていたのだから、私は普通でないことが嬉しい。

序章 少女にかけられた呪文（後書き）

次回の更新は13日の予定です。

第1章 瞳は黒くても、世界は真っ白だった（前書き）

第1章 瞳は黒くても、世界は真っ白だった

私は久野夕華。

沖縄のとあるところに建つ文都ぶんと高校の二年生だ。

五月も後半を迎え、もうすぐ行われる我が校伝統の文化祭に向けて、催し物のアイデア起草に追われている。

ついでに言うと、最近腹の立つ出来事のせいで、一人の男子を憎んでいた。

「何よ！ ああもう、思い出すと頭にくるわ！」

私は手を後ろに伸ばして、締めつけ具合がうっとうしいゴム製の髪留めを外すと、大きく頭を左右に振り、髪型を整えた。

髪は長いがよく後ろで結んでいることが多い。

女子の間では夕華。

男子の間では良くて久野さん、悪くて茶色い出来立てポニーガール、と呼ばれていた。

おそらくこの一本縛りが、彼ら男子生徒の恋に飢えた目にそう映ったのだろう。

独創的なアイデアを期待する、と文化祭の出し物企画用紙には印刷されていた。

まるで年寄りでも分かるようにその部分だけがフォントで異様に強調され、それは誰かの嫌がらせに見えるほどだ。

その印刷の下には、 ただし、一般の常識から外れたものでない範囲に限って提出したとみなす とあった。

こんなとき、彼なら、木島隆平ならどうするのだろうか？

さすがに彼でもそれはないだろう。

私は頭に浮かんだ、もはやこの世のものではないアイデアを記憶から消していった。

これでまた振り出しに戻ったわけだ。

もう小一時間もこの状況が続いていて、私は今日中に決まらないのではと焦りはじめた。

独創的かつ、常識内、は例えるなら水と油だった。

油はシャンプーで流してしまえば良い気がした。

「仕方ない。とにかくお風呂で考えよう。」

私は湯船に浸^つかってみた。

ここにいても彼のことはかりが気にかかる。

その存在が普通でない限りは気になってしまつのも無理はない。

それよりも、どうしたら良いアイデアが浮かぶのかを考えなければならなかった。

普通に悩んでいても何の解決にもならないのは、先ほどのアイデア用紙を片手にうなっていた時間ですでに証明されている。

「あいつなら、どうするんだろう?」

いつそ常識にとらわれずに行動したらどうか?

私は急に何かをひらめいたような気になって、うつむき加減の首を上げた。

そうだ、常識はかえって邪魔だ。

そもそも、独創的なアイデアに常識というパズルのピースは当てはまるのだろうか?

はまるものか。

だから何も生まれたいし、思いつかなかったんだ！

生み出すことができなかったんだ！

「バカバカしい！ 本当に、私ってバカ…」

彼は教えてくれた。

この湯船にあふれる液体も、滝のようなシャワーの音も、見方を
変えればいい。

誰に笑われようが、何もアイデアがないやつよりはマシなはずだ。

「よし！ やるぞ！」

私はなんだか楽しくなってきた、天井に腕を突き上げた。

おかげでわきの筋肉をつつてしまったが、そんな代償とは比べ物
にならないくらいの何かを得た。

この枠から外された解放感。

無限の宇宙を旅する自由な創造物。

私はつくるんだ！

普通じゃない証明をしてやるんだ。

今この場から、常識という白黒の世界から抜け出そう！

翌日、私は久しぶりに早く家を出た。

こんなことなら遅くまで起きていなければよかったと思ったが、なぜか学校へと行きたい気持ちが前を向かせた。

「あのバカ、見てなさい。文句言つてやる。」

隆平の教室は隣にあった。

昨日の夜、さんざん寝る前に頭の中で彼をやっつけたのに、それだけでは気が晴れなかった。

ぐだぐだと一人で悪口をつぶやく私に、妹がたずねてきて、心配そうに見つめた。

妹は今年で中学二年になるが、小さい頃のように私に甘えてくる。

中学二年といえば、私が一番荒れていた頃だ。

何をするにもネガティブで、マイナス思考で消極的だった夕華に比べたら大違いと母にからかわれ、むっとした。

妹の美沙が急に憎らしくなって、思わず彼女のところまで行つて、しばらくにらみつけた。

「ねえ、お姉ちゃん、どうして私のこと怒ってるの?」

妹は私の視線におびえきっていた。

おびえながら宿題に集中していた。

私は自分のとったこの行動を若者病、と呼んでいた。

道理は通っていないが、頭にくるととにかくキレる、とにかく怒る、気のすむまで怒り狂う。

若者にしか見られない稀有^{けう}な症状。

それは大人になるにつれて姿を消していくのだ。

後になってついに泣き出した妹が、私に甘えて子猫のように胸に飛び込む様子はさすがに特殊^{やまい}な病で、私は命名に困ったものだ。

そんなことを考えていたとき、私は母よりもっと憎らしいものを見つけた。

後ろから追っている様子に、彼は全く気がついていないようだ。

「木島！」

大きな叫び声をあげて、私は彼の背中を思い切り平手打ちした。

彼のおいが手についた。

「痛っ！」

女の力でも、つたなく、小柄な体軀は半ば吹き飛びそうになって
ゆらめいていた。

「なんだ？ ああ、久野さんじゃないか。 昨日はよく眠れた？」

彼は怒る様子もなく、にこやかに手を上げて挨拶をしてきた。

不覚だった。

こいつには普通のルールは通じないのだ。

「よかった、僕の顔を覚えててくれて。」

「ちょっと、私は別につ！」

案の定、私は彼のペースに呑^のまれていた。

これではまるで隆平のことを私が好いているみたいで、ものすごく
恥ずかしかった。

「じゃあ、どうして話しかけたの？」

「シ・カ・エ・シ！」

さらに頭に来て、夕華はもう一発彼にお見舞いした。

バシンという物騒な音が、吹奏楽部の部員たちの歌う上の学窓^{がくそう}ま
で響いたようだ。

「ゲホッ！」

彼女たちは目下の状況を見て、たちまちうわさを始めた。

男女間のトラブルほど彼女たちにとっての好物はない。

フラレたの、とか、あの二人はどうなるの、などと永遠としゃべり続ける。

「わかった。新しいあいさつを考えてきたんだね？ 久野さん、つてすごいな。もう少しおとなしいと思っていたけれど、本当は

…」

「私は怪力女じゃありませんからね。あと、それがあいさつだったらあんた死ぬわよ？」

彼はそれ以上何も言わなかった。

勝った、と思った。

が…

「嬉しい？ 僕も嬉しいよ。そんなに丁寧に注意してくれるなんて、よっぽと僕のことが好きなんだね。」

「ちがーーーーーっ！」

「では、アイデアを書いた紙を前の教卓に提出してもらおうぞ。」

私が彼に勝利しそこなってから数時間後、昨日書いた文化祭のアイデア用紙を出すときがきた。

そういえば、彼は何を書いたのだろうか？

思えば隆平から学んで今の私がここにあるのだ。

「少し、叩きすぎたかな？ いやいや、油断ならぬやつめ。」

私のアイデアは、 「恐怖、宇宙たこ焼き死の串刺しショー！」 というものだった。

私にしては頑張った方だ。

「このアイデアは後日私がチェックして、生徒会に通し、選ばれたら採用となる。」

先生の声に、なんだ、と私は少し落胆して肩の力を抜いた。

この教室の中で決めて、その代表が生徒会に通さない限りは、意見を見せる場がないのだ。

所詮はそんなもの。

文化祭といっても、何もやらずに終わってしまうクラスだってある。

適当に思い浮かんだだけのものもやましたアイデアをさっさと提出

し、皆いつものだらだらとした調子でおしゃべりや馴れ合いをする
ほうが楽しいのだ。

これが普通というものだ。

色なんかなくなつて、いつの間にかやっていけたりしてしまう。

行事の終わりには、素晴らしい文化祭、思い出に残る体育祭とい
う社交辞令が飛ぶ。

一体何が残るのだろうか？

私にとってはつまらないものでしかない。

「つまんないな。」

「なんだ久野。良いアイデアでもあるのか？」

とつさに出た私のうつぶんに反応する教師。

どうせお前も少年時代には、ここにいる人たちと似たような世界
にいたくせをして、何を偉そうに。

私は面倒くさくなつた。

誰に聞いたつて、独創的なアイデアを常識として受け止めて考え
る奴などいない。

そんな途方もない哲学は嫌だった。

そんな難題をなぜ私に押しつける？

想像力ならあんたの方がずっと上だ。

生徒が自分でやることに意味があるというが、教師にも思い浮かばないものを、まして生徒にやらせるというのが間違っている。

という以前に、皆やることに価値を感じていない。

だったらあんたが皆を動かせばいいじゃないか？

私は社会に対する怒りを感じ取った。

あんたが動けば皆動く。

そうでもしなければ、高校生活なんてつまらないままだ。

教師は皆を導くためにいるはずで、それをせずに何が「先生」だ。

今は手本となる大人でさえも、つまらないんだ！

「何かあるか？　おい、久野？」

「先生は？　先生には何か良い案でも？」

彼は何を分かりきったことを、とあきれた顔をした。

「あのな、久野。　先生が考えたら何にもならないだろう。　お前たちが考えて、やるから意味があるんだ。　違うか？」

このマニュアル通りの言葉のせいで、何かが頭の中でキレたのだ。

「違います。 そんなの、おかしいです。」

「え、なんだって？」

教室中の生徒たちが、立ち上がったままの私に視線を集中させ、ザワザワとしていた男子も静まり返った。

第1章 瞳は黒くても、世界は真っ白だった（後書き）

次回の更新は16日の予定です。

第2章 その涙の意味を、いつか分かち合える日が来るだろうか？

「違います。先生は変です。いいえ、普通という名の病気に
かかっています。」

全員の瞳が、一瞬で私に向けられたのが分かった。

これが、普通の引力なのか？

それでも私は口を開く。

「私は、一人の人間として先生を見ています。」

男子の一人が、挑発気味に口笛をヒューと鳴らした。

でも、そんな意味で言ったんじゃない。

「待て、それはつまり……」

驚いた。

この教師もどうやら意味を取り違えているらしかった。

私はその程度の頭の女としか見られていなかったということだろ
う。

本気で私の言った意味を、教師は考えてはくれなかった。

本気じゃなかったんだ、このうそつき！

「そういう意味じゃありません！」

だいたい、それでは話の内容が飛び過ぎてよく分からないはずだ。

「なら、どついう意味だ？」

言つんだ自分。

勇気とは与えられるものじゃない。

自分でつくるものだ。

私は両肘（ひでり）を灰色の机について手を組む男に言い放つた。

「先生はなぜ考えないんですか？ 生徒がいて、先生がいる。

それが教室です。違いますか？ 授業だつて先生がいなかったら、私たち何もできません。私は先生のその決まり文句が嫌で仕方ありません。」

何よあの子、という声やあざけり笑いが周囲から聞こえてくるが、かまうものか。

私は女だ。

嫉妬深い女に生まれたからには、絶対に最後まで全部言つてやるんだ。

「私を、私たちを差別しないでください！ 確かに想像力では先

生の方が上で、先生のアイデアの方がいいに決まっている。でも文化祭だって、行事はみんなでやるもののはずです。なぜ先生はアイデアを出さないの？なぜ自分だけ特別だなんて思うの？私はそれがさみしいです。はつきり言いますが…」

私は大きく深呼吸した。

「私は本気です。本気だし、普通の子じゃありません！私を差別しないで！差別であなたの心を汚さないで！大嫌い！」

「おい、久野！」

先生の呼び声にも応じずに、私は相変わらず彼に向かってヒューヒューと高い音を出す下らない教室を後にした。

「お前たち、静かにしないか！」

「女たらし！」

「キモーい！」

教室では先生に対するブーイングや理解不能の男子の叫び声が飛び交っていて、もはや授業どころではなくなっていた。

俺は何をやっているんだ。

大好きな片想いの子が出て行つたのに、その子の正体を知って幻滅して、追うのをためらうなんて。

クラスの片隅で、夕華を今日までひっそりと愛してきた潮田弘樹しおたひろきは、入学して以来、この文都高校初の大クーデターを前に、何をすべきか見失いかけていた。

あの担任が、生徒をうまくまとめることができない器であることは、彼自身も薄々気づいていたし、それが今になって明らかになったところでどうでもよかった。

だが、彼女の人柄には目を見張った。

彼女は一体どこへ行つたのか？

自分は普通ではないと言っていたが、何か悩みがあつてああなつたのなら、身勝手ではあるが、片想いの相手として放っておけない。自分の手であの子を悲しみや邪険から救つてやりたい。

「倉澤のバカヤロー！」

教室は、教師である倉澤道雄くらさわみちおの悪口でますますヒートアップした。

あげくは一部の男子による帰れ帰れの大合唱までもが発生した。

「おい、静かにしろ！ 先生を呼び捨てにするんじゃない！」

皆が先生に反逆していた。

フランス革命を世界史で習ったが、今この現場についてはそれ以上のような気がする。

自由を求めて授業をたたきつぶす、民衆、もとい生徒たちは目の前の惨劇に夢中で、誰ひとり俺に気づいてはいなかった。

潮田はトイレに行くふりをして、それとは反対の方の廊下に向けて走って行った。

屋上から見える星を想像する機会など、私にとって少なくともこの二年間、ただの一度もなかった気がする。

一目見たら、どんな気持ちになるのだろうか？

「はあ…」

ここに来てからため息はすでに十回目だ。

汚いコンクリートの上に寝そべって、空を見上げる瞳に映るのは、雲に隠れておぼろげな光を放つ太陽と、沖縄の潮風に乗って優雅に舞う海鳥の群れ。

ああやって高いところまで行けたら、誰にも普通がいいなんて文句は言わせないのに…

「何してるんだ？」

「うわあ！」

無意識のうちに人影を見た私は頭を思い切りぶつけそうになった。

立ち上がって振り向くと、うちのクラスの潮田がそこにいた。

「なんだ、君か。」

潮田と夕華は顔を知ってはいたが、あくまで同じクラスだからという理由で互いを確認できるくらいの縁しかなかった。

「私に何の用？」

もしかしたら、笑いに來たのかもしれない。

彼女は警戒して険しい顔つきで接した。

「そんな目で俺を見るなよ。俺は、その、お前が心配で……」

「今初めて話をしたのに？ うそつき。」

「うそじゃないって。ちゃんと心配してるよ、久野。なあ、どうしてあんなこと言ったんだ？ 皆じきにうわさするぞ。お前のことを……」

「やめて！」

彼女は精一杯力を込めてひなつた。

はるか上空を飛びまわる鳥たちが、彼女の声を仲間の声と勘違いして鳴いていた。

「悪かったよ。俺はただ、お前を助けたくて…」

「あんたには分からない。私は普通になりたくないの。」

先生にあんなことを言うてから、私はもう普通の子と違って、皆の輪の中に入ることなんてできない。

無理に戻ろうとも思っていない。

でも、なぜ私は泣いているんだろう？

恐ろしいのではなくて、さみしかったのではなからうか？

そう、普通ではない子が私だけ。

「ほら、ハンカチかしてやるよ。戻ろうぜ、教室に。」

女心としては一人にして欲しかった。

戻ったところでみじめなだけなら、ここにいた方が良いのだ。

「やだ。私帰る。」

「帰るって、学校はどうすんだよ！ いい加減目を覚ませよ。どうしてあんなこと言ったんだ？ 誰かに何か言われたなら俺が…」

「そんなにみんなの中にいたいのか？ どうして？」

彼はなぜそこまで集団にこだわるのだろうか？

そんなにみんなと同じ、普通がいいのなら、私のところになんて来なければいい。

そんなに私を連れ戻して以前の漫然とした無気力なクラスにしたいなら、彼一人でやればいい。

彼と教師と私以外の全員で、死ぬまで二セモノの喜びを満喫していればいいんだ！

私は心の中にその気持ちをしまいこんで、屋上から逃げ出そうとドアを開けた。

「...。」

「やあ、久野さん、と、お客さん？」

やつだ。

いつの間にかそこに木島隆平が立っていたのだ。

第2章 その涙の意味を、いつか分かち合える日が来るだろうか？（後書き）

次回の更新は20日の予定です。

第3章 さみしさを分かってくれる人

私の前に、いつもの「あいつ」が立っていた。

あきれるほど素朴な顔つきで、だが私を確認するとにやりと笑った。

いつからそこにいたのかは知らない。

目に涙をためて、それがあふれ、頬をつたって制服をすべり降りていき、こぶしの先に握られている文化祭のアイデア用紙を湿らせていた。

私は紙に書かれたものがなんであるかすぐに分かった。

なるほど、私はまだ彼についての行動を予想するには未熟だったということか。

普通でない彼は、私のように普通に、面白おかしいアイデアを描くのではなく、それすらぶち壊して何かを得ようとしていた。

答えなんて、そう簡単に見つかるはずがないのに…

「やあ、久野さん。そちらは、お客さんのようだけど？」

「知り合いなのか？」

この時の潮田の顔は、私への下心が丸見えだった。

おそらく彼にはもつと鮮明に見えているに違いない。

「ちよつとね。」

私は隆平の何なんだろう？

あの夕陽の熱に照らされた教室で会った日から、彼との不思議な関係は始まった。

「お前、久野の何なんだ？」

潮田は明らかに怪しい男を見るような目をしている。

いけない。

今やつと話したら、絶対に喧嘩になる。

「私、もういかなきゃ。」

普通とは違う考えの彼に、はたして潮田は冷静でいられるだろうか？

私というものを奪われたと感じたら、こんなふざけたやつに俺は負けたのかとなるに決まっている。

私は必死に彼の気をそらそうとしたが、うまくは行かないのが現実だ。

「なんだこいつ。泣いてるぞ？」

このバカ、泣いて入ってくるやつがいるかと言いたくなった。

あまりの彼の意外な行動に、潮田はショックと笑いを隠しきれなくなっていた。

そんなに、そんなにおかしいか潮田。

何だろう？

私は隆平に親近感を抱いていたということだろうか？

彼を笑うなど、私の心が叫んでいた。

思えば彼は、あんなことをした私を、最低だと自ら証明した私を、セクハラ絡みと言えば聞こえは悪いが、熱い抱擁で包んで、赦^{ゆる}してくれた。

くやしい。

彼を侮辱した潮田を、今すぐぶっ飛ばしてやりたい。

「こんなやつと久野は知り合いなのか？」

違う！

「そうさ、泣いている。僕は泣いている。」

突然、彼が初めて真剣な口調で話した。

「普通でなくなつて、昔は普通だった。今は違うけど、普通でなくなつて、そこにはちゃんとした理由がある。人の人生を、生き様をバカにできるほどだったのなら、君は相当幸せに生きているだね。うらやましいな。」

ちょうど相槌あいづちを打つように、チャイムが鳴った。

こんなにさみしげな音色は、今だから、学校という枠に入るずつと前からでも聞いたことがない。

ささやくような彼の声と鐘の音は、絶妙にからみあって、私は不動の姿勢で、やがて降るであろう雨を待つ人になった。

また涙があふれてきた。

でも、さっきの涙とは全然違う。

泣いて情けない姿をさらしているのに、ほんのり温かい血が胸のそこから湧き上がってきた。

「隆平。」

「なんだい。」

「私は、幸せなのかな？」

こんなこと、バカげている。

まともな答えが返ってくるわけがないのに、私はこの初めて感じた気持ちに翻弄ほんろうされていたのか？

そんなとき、彼はこう返事した。

「一緒に不幸になろう。それなら二人で幸せになれるよ。きつと。」

ぬくもりを感じる。

あの二度目のあいさつが、私の古い存在から私を解き放っていくように、降りだした雨が人の情を知り、反対に雨の群れに打ちつけられる私たちは、互いの深いところまで気持ちを探り合ったのだ。

「バツカじゃねえのお前ら。意味わかんねえ。」

私を取られた腹いせか、居場所のなくなった潮田は濡れる体を揺らしながら屋上から出ていった。

「私を抱いてると、風邪引くよ？ いいの？」

「ああ、構わない。今ちょうど、濡れに来たところさ。」

本当は涙を隠したいのだろう。

「でも濡れに来たの本当の意味は？」 と私が聞くと彼は…

「もしこの雨たちが蒸発して、もう一度大地から天へ帰って行ったら、僕の存在に気づいてくれるだろうか？ どう思う？ 君が来る前は、僕はずっと一人で、代わりに雨たちが返事をしてくれた。」

そうか。

隆平はずっと一人でさみしかったんだ。

だから変な話だけど、私にあいさつしに来たのだろうか？

あんなに心地よさそうな笑顔をしているのに、内側はとっても傷つきやすくて、繊細だったんだ。

だから同じ立場にいる私がもらい女だって、思っているのかな？

私が私自身の弱さに気づいていないだけかも…

「でも良かった。隆平は私に会えたんだもの。ね？」

「本当にいいの？」

彼は潮田が出ていった方を向いて、私に呼びかけた。

私と彼は、果たして会えてよかったのだろうか？

でも、彼に私の気持ちなんて、分かるわけがない。

「私、できないよ。潮田を追いかけたくない。」

人には人の生き方がある。

それが世の常であるし、本当はあなたと二人でこうしていたい言い訳だったことも分かっていた。

「それに、隆平は？　私が行っちゃったら、隆平はまた一人になっちゃうんだよ？」

私だって一人になってしまったら、どうやって生きていけばいいのかと途方に暮れてしまう。

隆平が、私のそばについてくれなきゃ、私は…

「私のそばに、隆平がいてくれたらいいのに…」

一度離れてしまったら、戻ってこられる自信がない。

古傷の痛みがぶり返してきたような感覚に襲われた私は、なんにも考えられなくなった。

「いいんだ。君は僕を理解してくれたんだろう？　行ってあげるといい。彼だっけと待っているとは限らない。」

「やだよ…」

隆平が私から離れていく。

いや、私が隆平から遠ざかっていく。

「久野さん。　僕なら大丈夫。」

「私は大丈夫じゃない！　ダメ。　これじゃダメよ…」

「今までだって一人でやってきたと言えば、君との出会いを否定

することになるけど、僕だって、かなり本気だったんだよ。君と一緒にいようと、いつの間にか本気になってた。」

「そんなこと言われたら、まずまず一緒にいたくなるじゃないか、このバカ！」

性格も、ルックスも、背丈もいまいちで、どこにでもいる男子なんだ。

なのに魔法のように世界を変える力を持っている、夢のような存在。

また私に魔法をかけて、戻りなくなったら連れて行ってくれるだろうか？

空を飛ばせてくれるだろうか？

「ごめんね。私って弱いんだ。」

勇気はつくるものだけど、今日のはまぐれなんだ。

だから…

「だから負けそうになったら、隆平のもとに来ていい？」

「…」

彼はうなずいてくれた。

そういうところに、私はいつのまにか惹かれていたのかも知れな

い。

「ありがとう、またね。」

雨はやんでいた。

「私、やってみる。」

水にぬれた靴音が、妙に軽快な水しぶきを上げた。

第3章 さみしさを分かってくれる人（後書き）

次回の更新は24日の予定です。

第4章 意志の代償（前書き）

読者の皆様、お疲れ様でした。唐突に何をと思われたことでしょうか。本作はこの章以降は作風の「堅苦しさ」を新たなる始まり（第五章のテーマ）より、一新することとなりました。「堅苦しさ」のレベルを緩和することにより、これまでの章が単なる始まりの前の段階に過ぎないこと、および、これからの物語との区切りを明確にする役割を果たしていくため、今回、作風を変更することとなりました。作風を物語の途中で変更するのは、いかななものかと私自身大いに悩みましたが、深い考慮の結果、作家の意図（すなわち何を訴えたいか）が明確にされている部分が存在しているのなら、たとえその後の作風に変化を加えようと、訴え自身には変化がないために、結果として私の「小説とは何かを後世に訴えかけるものでなければならぬ」。なぜなら、それが人間的であることの証明に疑問を投げかけ、理性の発展を産むからである。」という信条に反していないため、今回作風を変更させていただきました。

当サイトに掲載されている作者の方々の作風を視野に含めましても、硬派な文章の方が好きだという方はほとんどいらっしゃらない、と私自身が感じたこともあり、「堅苦しさ」の基準を下げる方針を貫くことをお伝えいたしました。

第4章 意志の代償

廊下を濡れた上履きのまま、ペタペタと音を立てて走っていく女生徒が一人、授業中だというのに、カバン一つ持たぬまま息を切らしていた。

風に茶色いポニーテールを揺らしながら猛スピードで前へ進んでゆく様子は、例えるなら自分のクラスで男子がうわさしていたあだ名、茶色い出来立てポニーテールにそっくりだった。

私は、もう一度彼に会って話をしなくてはならない。

私がこうなる前、確かに彼は私に好意を抱いていた。

一つだけ不思議に思ったことがある。

男性は皆、顔で女を決めるものだとばかり思っていた。

だからきつい性格の奥さんでも我慢できるのだと、昔よく父から聞いたことがあった。

でも、今の私は何？

性格が悪いからという理由で、そつぽを向かれてしまった。

彼が人を性格で見る出来た人間だったことは嬉しいけれど、その彼を失った私は二倍の後悔をすることになったんだ。

「分かってる。」

私はゆっくりになって、次第に歩みを止めた。

「現実はいつもうこんなだって。 真実が正しくて、良い方向につながっているなんて、限らない。 一度穴に落ちてしまったら、一生抜け出せないままにいることもある。 だけど、それじゃ…」

そこにいた潮田は後ろ向きのまま、静かに首をもたげていた。

何かに集中しているようで、私が声をかけても反応しない。

だたその時私が知ったのは、彼のこぶしに、異様な力が入っていたことだった。

こぶしから感じとれたのは、暴力をふるいたいとかではなく、純粹な悔しさの表れだった。

「よう、久野。 もう来ないかと思ってたのに…」

彼は振り向き、上げた手のひらにくつきりと爪のめりこんだ跡のある部分を見せ、私にあいさつした。

「大丈夫？」

「さわるなって！」

びっくりした私は…

「そう、だよ。 私ってバカだよ。 あんなこと言うてから、

のこの顔出しに来るんだもん。ほんと、最低だよな。」

そう言って目を細め、涙が垂れるのを防いでいるほかなかった。

「俺はお前の人形じゃない。まあ、俺の片思いだけど、用がなくなったら捨てるなんて、俺の方こそバカだったよ。なんでお前なんか好きになったんだ。」

世の中は何でもそうだ。

今みたいに裏切りに裏切りを重ねたかたまりが、世の中をつくっている。

彼はもう何も信じようとはしないだろう。

信じなくなつて、誰も困らない。

なんといつても現代では皆、個人で城壁をつくっているのだから、悲しむ以前に、これがあたりまえなんだ、そうか、と気づかされてしまう。

誰も悪くはないけれど、それは誰もが良い人というわけではなかったからだっただ。

「もう俺に近づかないでくれ。 ああ、それともみんな帰ったから、教室のカギ閉めるの、よろしくな。」

彼はそばにあったロッカーの上に力強く鍵を置いて立ち去ろうとする。

「帰った？ どういうことなの？」

「俺に聞くなよ。」

苦笑いをした彼は廊下の角を曲がり、見えなくなった。

私のせいだ。

私のせいで、みんないなくなった。

みんなの後ろにある日常という背景すら、友情という絆きずなも、学徒の笑みも、机の横に掛っているこまごまとした、大切な思い出の品々すら薄れていった。

潮田のあの荒い黒短髪も見えなくなつて、私は膝ひざを折つて床に手をついた。

「普通じゃないって、どういうことなの？」

明日を信じて生きていても、もう未来はやってこないのか？

「私の時計は今日という日で止まったままなんだ。」

でも、私のしたことは決してバカだったなんて、絶対に思つてやるもんか。

彼女はついてきたキーホルダーごと鍵をわしづかみにして、教室へと続く階段を登りはじめる。

ものすごい速さで。

風がのどをかすめ、息が切れる。

呼吸が続かず、酸欠で足がうまく上がらない。

それでも…

「光のように速くなりたかったんだ。音速を超えた先に、真実が見えると思った私は、必死に光を探している。探し物は見つかったのかな？ 過去に逆流したかったわけじゃない。心の強さを試したかったんだ。」

「先、生？」

ドアを開けた先に待っていたのは、頭を抱えて机にもたれる教師の姿。

がらんとした空間の中にその男は佇たたずんでいた。

「久野か？ 笑うなら笑え。俺は、教師失格だったってことだ。お前の言うとおりにしたぞ？ これで文句ないな？」

外は昼。

明るかったはずなのに、ここは夜よりも暗い闇が支配していて、あるはずのない状況が私を苦しめていた。

「どうした、俺が嫌いなんだろう？ もつと喜べ。」

私は、こんな結末なんて望んでいなかった。

ただ、現代と違う生き方をしたかっただけだった。

「どうして、こんなふうになっちゃうの？」

私のメッセージは学級崩壊という形で返ってきたのだ。

「あたりまえだ。そういうはぐれ者は社会で生きられないんだってことを教えるのが俺たちの仕事だ。お前の言うように、俺が動かないと、だろ？」

まさか…

みんなを帰らせたのは、わざとそう仕組んだのは、あんただったのか…

「あんたなんて、あんたなんて…」

これだから大人は嫌いだ。

善人ぶっているくせをして、影でこそこそと笑っているのだから。

「あんたなんて、いなくなればいいんだーーーーっ！」

腹の底から発した私の怒号は、隣の廊下のかなたまで響き、消えていった。

「うるさいぞ久野！ 俺にはお前をまっとうにする責任がある。黙って従え！ これはいいか？ お前のためだ！」

「ウソだ！ うわああああーっ！」

「おい久野っ！ 暴れるな！」

倉澤は私の体を抑えつけて、その身を封じようとする。

「はなして！ はなせ変態！」

「変態とはなんだ！ お前のためにやっているのに、その言い草はなんだ！」

最低だ。

何もかも。

泣きじゃくる私はやがて力尽き、教師のされるがままになってゆく。

さらば、私の尊厳。

散り際の言葉にしてはどうもしっくりこない。

もう少し慎重に言葉を選ぶべきだったのだろうか？

「忘れたのか？ これはお前のためだ！」

「そう言っていれば引つ込みがつくと思っっているなんて、本当にあんたのためになるのかよ？」

突然現れたのは、私を見限ったはずの潮田だった。

「潮田。お前にも分からせなきゃならんようだな、ええ？ い機会だ。時間はたっぷりあるんだぞ？」

「分からせる？ あんたに学ぶことなんて、何もないよ。」

教師は彼の言葉に、ついに本気になった目つきで怒りだした。

無理もない。

ニセモノと偽善、それに暴力でかためた教師という特権の裏にある闇を暴かれ、自分がそれにすがって生きる卑怯な奴だと勘付かれたのだ。

「先生に向かって、そんな口の聞き方をするんじゃない！」

「うるせえ！」

彼は目の前にあった机を力まかせにひっくり返し、それを床にたたきつけた。

バアアアアン！

木のフローリングにはいびつなへこみができ、机の中に入っているかわしいグラビア雑誌が数冊飛び出した。

「久野のためだったら、あんたにできないことだって、俺はできるんだ！　いいか、教員もどきが良く聞けよ！　俺は、久野を愛している！」

私のこと、本気で嫌いになったわけじゃなかったんだ。

彼はちゃんと分かっていた。

普通じゃないというだけで、差別しちゃいけないんだって…

自分のほうこそ、頭の中のもやもやを整理できずにいたことが情けない。

「久野、大丈夫か？」

「うん。でも、私だよ？　いいの？」

いいに決まってるじゃないか。

それが彼の返事だった。

「誰だお前は！　元いた教室に早く戻るんだ！」

倉澤の声はもはや稚拙な恫喝にすぎず、隆平は全く動じていなかった。

その彼が、心配ですぐに駆けつけてくれた。

「隆平、私……」

どんなに歯を食いしばったとしても、涙は流れていただろう。

「久野、来るんだ！」

不意を突いて、教師の汗ばんだ手が私に伸びてきた。

「おっと！」

私の体は教師ではなく、潮田の若い肉体に支えられていて、彼は私にっこりと笑いかけてきた。

「スキってなんだろうな？ 俺、自分は性格でものを見る人間なんだって、言い聞かせてるだけだったわかった。変な話けどさ、好きになった理由がいまいちよく分からないんだ。こういうのを、若者病って言うんだろ？」

「世の中には、理屈で解明できないこともある。何しろ僕は、いや、僕らは普通じゃないからね。」と隆平。

「私も、いいと思う。」

三人は無口だったが、自信に満ちていた。

「さあ先生、僕たちを罰するなら好きにすればいい。今、あなたの人間としての高貴さが試されているということをお忘れなく。」

結局、私たちは二日間の自宅待機を言い渡されたけれど、なんとなく強くなれた気がした。

隆平のおかげでもあるし、潮田から私に贈られた気持ちもそうさせてくれたと言ってもいい。

そして、その翌日…

第4章 意志の代償（後書き）

次回の更新は28日の予定です。

第5章 新たなる始まり（前書き）

いよいよと言えるほどではないかと思いますが、多少は受け入れ難いまじめな文章を緩和した物語の始まりです。（四章までは私の信条ですので変更はありません）なんと言っても今回の物語一新のメリットは、第一に「にぎやかさ」、第二に、「仲間の個性と魅力、さらには親近感」です。これからはそれらをテーマに物語を進めていこうと考えております。もちろん、物語のはじめと締めくくりはそれ相応の私の信条に沿って作成します。（各々の章ごとではなく、物語を総合的に見た時の基準という意味です。）

第5章 新たなる始まり

「エメラルド色の海は貯水池のように、風もないためか、ひとつのうねりも起こさなかった。」

誰かが一人で歩きながら、潮風にべとつく髪をふわりとさせて下を向いている。

「これは現実なの？」

「そう、君が君である以上、僕はこの無の状態から逃れることができないんだ。僕の血を分けてあげようか？ 君が望むならね。」

「いや、やめて！」

「どうして？ 僕にはもう必要のない命なんだ。 君が悲しんだところで無駄な心配だよ。」

その声に反応して、誰もが驚き、または笑って見ている。

「無駄なんかじゃないわ！ あなたは死ぬことで大切な者たちと一緒に、記憶を消そうとしてるのよ！ 私にはわかるの！」

「分かるかあああああ！」

突如として現れた彼女によって、歩きながら自作の小説を演劇気味に音読していた木島は強烈な本のピンタをくらった。

「何が、いや、やめて！　だ。みんな見てるでしょ？」

夕華は不機嫌の絶頂にいるような顔で、プイツと横を向いた。

「久野さん。　いやすがだね。　二日間も休むとこれだけストレスがたまるのか。　でも、いいの？」

「え？」

彼女は今自分のとった行動のせいで、周りの反応に気がついて声を失った。

二人はまさに学校中の好奇の目にさらされている。

「恋人みたいだね、僕たち。」

「変な想像しないで！」

「よう、二人とも元気か？」

潮田ははじめは威勢よく声を張り上げたが、次第に状況を理解して、おそるおそる質問した。

「なあ、お前らひょっとして…」

「違う違う！　こいつよ！　こいつが悪いの！　だから、別にこいつが好きとかじゃなくて、え、ええと…」

彼女の慌てようを見て、彼は隆平に向けてため息をついた。

どうしてこうなったのかを知りたかったのだが、隆平の涙を見た彼はたずねる気が失せてしまったのだ。

「なぜとは聞かねえけど、やっぱり気になるな。」

「僕はどっちでも。もし聞くなら、今度は君を泣かせてあげるよ……」

木島の笑みからはまがましいオーラが漂っていた。

「いや、やっぱりいい。お前の目で分かった。」

「そんなことより。」

「ん？」

隆平は夕華に向かって、いつものように落ち着いた声で話しかけた。

「僕たちで、何かをやらないか？ 普通じゃ出来ないことをね。おもしろそうだと思わないかい？」

「普通じゃできないことか？」

私は高らかに鳴るラッパの音の方に視線を投げた。

あの音楽好きの少女たちを普通というなら、私は何なのだろう？

「そんなこと、考えたこともなかったな。何か、いいアイデアないか？」

潮田よ、聞く前にまずは自分で考えよう、と彼女は心の中でつまらない俳句を作っていた。

結局、二日間の休みの間に文化祭のアイデアは不採用になっていて、今さら考える気も失せていた。

「そうだ！ 私たちだけの部活を作ろうよ？ 文化祭の出し物も私たちだけでやるの。どう？」

「俺たちだけでやるのか？」

苦笑いを浮かべて逃げようとする潮田のワイシャツを、彼女は素早く反応してつかんだ。

なにも行事をクラス単位で行うこともない。

何かを自分でするという目的は同じはずだから、きっと許可が下りるはずだ。

そういったことを見越して、夕華は自信をもって彼を連れ戻した。

「潮田は私のこと嫌いになったの？」

「いや。お前のことは別として、とにかく面倒は嫌だ。」

彼が泣いて許してくださいと願い出る姿を想像していた夕華は思わぬ彼の言動にたじろぎ、むーっとした顔で潮田をにらんだ。

「ふっ…」

彼をぼこぼこにしようかと考えていたとき、隆平が急に鼻であざけり笑いをした。

「面白い。君のアイデア、やってみよう。それと潮田。もし君が彼女によって逝^いったら、僕がこの腕で悲劇のストーリーを書いてあげるよ。」

場の流れは一気に進んだ。

彼女が目を光らせ、ニタニタと笑いながら隆平の頭をなでると、潮田の腰を抱え込んで、樹のそばにあったくずかごに頭からシュートした。

「決まりね。そうとなったら、さっそく生徒会長に部をつくる許可をもらわないと。」

「ああ。僕が今日の放課後にうまく掛けあってみるよ。それと、なんて美しい死に様なんだ君は。さあ、どうやって表現しよう。」

潮田は白目をむいて口をあぐりとあけていた。

そしてしばらくして起き上がって、苦勞の末に、白いペンキで塗られたくずかごの中から脱出した。

「お前の美しさの基準が分からんわ！　あと、わざわざ文章で表現するな！」

彼の息の切れがちな声のあと、すぐに授業の始まりを告げるチャイムがなった。

「そこをなんとかお願いします。」

隆平は夕華と潮田の三人で、生徒会長を務める道谷正使みちたにまさしに深々と頭を下げていた。

部をつくるには部室が必要だが、先ほどから許可が下りる気配がない。

「我が校では、部員は最低でも五名以上を有しなければ、部活動を行う権利は認めない。わざわざ私に聞きにこなくとも、生徒手帳に書いてあるはずだが？」

つりあがった目つきと、くすりと笑うそにない仏頂面をした彼らとは一つ違いの男の先輩だった。

夕華と潮田が呼ばれたのも、人数をごまかしていないかどうかという会長の意向だった。

「ですが、私たちは部を通じて何かを……」

「例外を認めれば公平さに欠け、校則は用済みも同じだ。それに何かだつて？」

会長は手帳を閉じて、椅子にだるそうに腰掛けた。

「目的も定まっていけないものなど、相談するにも値しない。まさか、寝ぼけてるんじゃないよな？」

「隆平、何か言つてやつてよ！」

こんなとき、彼ならどうにかしてくれると思っていた。

「会長……」

隆平の真剣な顔と言葉に、道谷会長も筋がありそうな男だと判断したのか、微妙に眉をひそめた。

「何かね？」

場の空気が重々しくなつてゆく。

「すげえ、二人の間に燃え盛る火柱が見える。」と潮田。

当然そんなものは見えないが、妙な威圧感が場を支配していた。

「会長は……」

いけ、言つてやるんだ隆平！

私は口が開いているのも忘れてその二人をじっと凝視した。

「会長は、ハイソックスとニーソックス、どっちが好みですか？」

「このバカあああああ！」

「ぐはっ！」

ドスっという強烈なこぶしの音とともに、隆平は倒れた。

「失礼しました！」

「おい、久野！」

彼女は話をそらした隆平を殴った後、気絶した彼を引きずって早々に場を立ち去った。

「隆平、大丈夫か？」

潮田はとりあえず保健室まで行き、夕華に殴られた彼の頬を手当てしていた。

普段なら保健室のおばさんがいるのだが、放課後の時間になるといつも帰ってしまうのだ。

「自業自得よ。」

痛みに顔をゆがめる隆平に向かって、彼女は相変わらず厳しい態度を崩さない。

「あんまり怒るとハゲるぞ?」

潮田が冗談交じりに言った。

もちろん彼女をなごませるためだ。

「それを言うなら、しわが増えるでしょ?」

自分で言うのも女として恥ずかしかったが、今はそんな気分ではない。

なにしろ部をつくるチャンスをこのバカのせいで台無しにされたと本人は思っていた。

「いやいや、ここはあえて、『あんまり怒ると、インド産のコシヨウ国道に振りまくぞ?』のほう君には似合ってるよ。」

それまで顔をさすっていた隆平が余裕の笑みで笑いだした。

「こいつ、全然反省してねえ…。ていうか、コシヨウまくなよ。」

誰も困らないが、肺の弱い老人なんかにはさぞきついだらう。

とくに排気ガスと香辛料のにおいが絶妙にマッチすると思われた。

「あんたねえ、少しは申し訳ないと思わないわけ? いい? 今

度あんなこと言ったら、コショウだけじゃなくて、教室の上の階からミルクティー垂らすわよ?」

何気に彼女もつられていた!

「面白そうだね。ミルクには養分が多く含まれているから、新種の植物が成長するよ、きつと。」

「だたの公害じゃねえか。」

潮田はこのやりとりがいつまで続くのか、頬づえをついて聞いているのも飽きたのか、自分からツツコンできた。

「なら私は、あなたをゆうちゃんと呼んでみたいです。」

「ちょっと、隆平、何言ってるって違う……」

彼女はその場にいないはずの声に、ふと振り返った。

「あなた、誰?」

おとなしい声の主が、文都高校の制服を着て、三人の前に立っていたのだ。

第5章 新たな始まり（後書き）

次回の更新は6月1日の予定です。

第6章 小さな火を灯していこう、目覚めのように

「あなた、誰なの？ どうして私の名前を…」

夕華の質問に、彼女はテーブルの上に置いてあるジャージを指さした。

夕華のY・Hのイニシャルがその先に刻まれていた。

しかし、イニシャルだけで名前を判断できるはずがない。

「ひよつとして…」

そう、この少女はおそらくYのアルファベットから適当に名を連想したのだろう。

「悪いけど、私はゆーちゃんじゃなくて夕華なの。ところで見ない子だけど、転入生？」

こくりと彼女は頷いた。

背は小さく、例えるなら人形のようにちょこんとそこに座っているような、物静かな印象を受ける。

眼鏡をかけていて、さらりとしたまっすぐな髪からは、清楚な香りがふんわりと引き立っていた。

「何年生？」

「二年です。」

明らかに生まれたての赤ん坊をあやす調子で話しかけた夕華は、自分と彼女が同じ年と知っておぼつかない愛想笑いをした。

いや、もはや苦笑いだ。

だが、その場にいた誰一人として夕華にドジを踏んだなどとは言わず、あっけにとられたように、この子が二年生だったのかという一言で言うなら信じられないという目をしていた。

「わ、私は久野夕華っていうの。あなたは？」

場を仕切りなおす意味を込め、彼女は小柄な体つきの少女に名をたずねた。

「ふじなみりっか
藤波律花。」

「律花さんね？　せっかく会ったんだし、友達に……」

彼女は言いかけてふと声を止めた。

そして隆平の方を見る。

自分たちの友達として迎えるかは、彼女がどういう性格なのかによつて決まる。

一方的に自分たちの集いつどの中に入れて、後で後悔させるのはかわいそうな気がした。

「僕はいいと思うよ。嫌なら無理にとは言わない。それだけさ。」

後味の悪さにかまけていたら、何も始まらないということだろうか？

彼女は迷っていたが、その間にも転入生の少女は勝手に話を進めていた。

「じゃあ、あなたは今日から私のゆーちゃんです。」

「ちよっ……」

新たについたあだ名に頬を赤く染めながらも、彼女の静止は振り切られた。

「私のことはどうぞ自由に呼んでください。エリザベス、エリザベート、エリザベータ。なんでも構いませんが、ジョルジエツトはだめです。」

力のないというか、声に感情の表れがなく、怒っているのか悲しんでいるのか不明なぐらいの棒読みで、しかも顔色一つ変えない。

それが律花だった。

ついでに言うと、なぜジョルジエツトがダメなのかは分からなかった。

「とにかくよ、本人が良いって言ってんだから、この際だから友

達になつてやろうぜ。」

途方に暮れる夕華の肩に手を置いて揉みほぐす潮田も、少女に自己紹介した。

「俺は潮田弘樹っていうんだ。よろしくな、律花。」

「はい。」

彼女は返事はしたが、潮田のワックスのかかった針山のような髪をおそろおそろ触ろうとする。

「何やってんだ？」

「いえ、これはなんという生き物なのですか？ ウニは人の頭に住むのですか？」

保健室に、一瞬だけ沈黙が流れた。

「あ、あのな。これはワックスって言ってだな……」

潮田が説明を始めるが、彼女は無表情のままで、ちゃんと意味が理解できているのかは分からない。

「ワックスとはおいしいのですか？」

「はいはい。ダメですよ。食べられませんよ律花ちゃん。」

何かと勘違いしている律花を必死に止めようとする夕華は、ギロ

りと隆平に視線を送った。

二人の視線が交差し、その間では激しい感情が心の中でぶつかり合う。

「あんな子部員にして大丈夫なの？　ワッフルと思ってるじゃないの、このバカ！」

「別に。　ああいう子がいた方が、意外と盛り上がっていいかもしれない。　おっと、自己紹介がまだだった。」

隆平は律花のところまで行って手を握った。

「よろしく。　僕は木島隆平だ。　趣味とかはあるの？」

「はい。　大地の嘆き・プラスシチュエーションです。」

「…。」

「何がプラスされているんだい？」

「それ以前に、大地の嘆きがなんなのか分からないわ。」

とにかく不思議な子という以外、他にどの言葉もあてはまりそうにもなかった。

「大地の嘆きとは、つまり…」

「おっと言わなくていい。　なんか聞いちゃいけない気がする。」

潮田の青ざめた顔は、とにかくやばい、この子は変だ、と訴えていた。

「これで残るメンバーはあと一人になったってことね。なんとできないかしら。」

最低でも五名…

会長の意地の悪そうな顔が不意によりみができる。

「大丈夫さ。俺に考えがある。」

「まさか、あいつ？」

彼は今はそれしか手はないという顔でうなづいた。

翌日、四人は昼休みの教室を抜け出して屋上にいた。

「あいつならいつもここらへんに。おっ、いたいた。よう荒山。」

潮田は貯水タンクの上に器用に登って寝そべっている男子に話しかけた。

背は高く、ワイシャツの下から赤い派手なシャツが透けて見えている。

髪は女のように長く、だらしなさというよりはどこか清潔感を漂わせていた。

「ん？ 潮田じゃねえか。 お前らクラス中のうわさになってるぞ？ ついに俺のように扱われる日が来たようだな。」

彼は起き上がって潮田と肩を組んだ。

「俺はお前を悪く言ったりしねえぜ。 何しろ仲間だからな。」

彼の名は荒山蓮。あらかまれん

夕華たちのクラスメートで、隠れてホストをしている。

そのせいで学校中から気味悪がられているのだ。

「悪いが俺はホストに興味はない。 でも仲間を探してるってことは確かだ。」

「ん？ どういう意味だ？」

彼は話を聞いて決心したようにがばりと起き上がった。

「つまり、俺にお前たちの集まりへ入れと？」

「まあ、簡単に言えばそうなる。」

だが荒山は、はあ、と息をもらして潮田に言った。

「いいか。俺はあのクラスでどう言われようと構わんが、かわいい女の子がいなけりゃ、話にならん。」

そう、この男の趣味はナンパだった。

いるのは夕華と律花の二人。

「この面子^{めんつ}では君の気は惹けないと？」

「悪いがそういつこった。それに部の名前もまだなんだろ？」

「名前は『ふとにぎりつぶしたくなつたあの日の自販機』でいいと思う。」と隆平。

「長えよ！何をやってんのかすら即興すぎて分かんねえよ！」
すかさず潮田がツッコむ。

「その前ににぎりつぶせないわよ。っていつか、こんなナンパ男じゃ話にならないわ。」

「なんだと？」

思わず言いすぎてしまった夕華は口をふさぐがもう遅い。

荒山は真剣な顔で、なぜか律花の前まで出てきて言った。

「やあ、かわいいね。眼鏡をとった君を見てみたいな。」

「ナンパかい！あーあ、緊張して損した。」

どうせこれは荒山のいつもの礼儀に違いないと思っていた夕華だった。

ナンパは趣味の領域とは言え、彼は会ってしまった女子は口説くのが常だといつも豪語していたのだ。

だが律花が眼鏡を取ったとき…

「ぐはっ！」

なにやら荒山は打ちのめされた声を出して、頭をもたげた。

「どうかしたのですか？」

律花がいぶかしげに質問すると同時に、彼は彼女の肩をがっしりとつかんだ。

「付き合ってください！ 可憐なお嬢さん。」

見事に一目ぼれしていた。

「はい。」

律花はあまりにもあっさりと返事をした。

「あと私は隆平さんの考えた名前よりも、『ふとぶっ殺したくなつたあの日の勇者』のほうがいいと思います。」

「もう一度言うが、長えよ！ つーか、あぶねえ言葉が入りすぎ

だよ！ 世界が魔王から救われねえし、バッドエンドだよ！ あと律花。付き合うとか、ナンパの意味わかってんのか？」

潮田はツツコミを入れ過ぎて息を切らしていた。

「はい、突き合つと難破ですね？ ちゃんと辞書で調べましたから大丈夫です。」

意味がかみ合っていないようだが、彼にはもうツツコミを入れる力が、とくに前者には残されていなかったようだ。

そのまま黙って床に倒れこんだ。

「なるほどな。俺って難破が趣味だったのか…」

なぜか荒山が納得していた！

「で、僕たちの集まりに参加するのかい、荒山君？」

「ふっ…。どうやら入るしかなさそうだな。俺は今日から律花一筋でいく！ ぎゃあああああ！」

律花の手を握ろうとした荒山はさっそく彼女の肘にみぞおちを突かれていた。

「ってことは、これで五人集まったのね？ やったー！ やったわ隆平！」

彼女の飛び上がるような歓喜の声は、午後のゆったりと流れる白い雲まで登って行った。

「なんだって？ 部室がないってどういうことだよ？」

潮田は予想もしなかった会長の言葉に声を荒げた。

「今述べたとおり、部室は全て他の部の使用で埋まっている。」

ならば、なぜ最初にそのことを私たちに言ってくれなかったのか、夕華は会長の自分たちを見下したような態度に腹を立てた。

「そういうはぐれ者は、社会では生きられないんだってことを教えるのが俺たちの仕事だ。」

「どうして？ なんで教えてくれなかったのよ？」

「聞きに来ない君たちが悪いだろう？ 君らにとって部をつくるということはそれほど重要ではないらしいから、私も言わなかっただけだ。そもそも、そんな中途半端な気持ちで事をなそうとする部は、かえって迷惑だよ。」

「くっ…！」

前に出ようとした夕華を隆平がおさえこんだ。

第6章 小さな火を灯していこう、目覚めのようにな（後書き）

次回の更新は6月5日の予定です。

第7章 会長のとある悩み（前書き）

こんにちは。 さて、今回で8回目の投稿となるわけですが、どうやら皆さんにご満足いただけていないようです。 話の展開の仕方や登場人物など、さまざまなところに問題があるのかもしれないかもしれません。 簡潔に申し上げますと、失敗したということになります。

そこで私は、失敗作をこのまま書き続けるのか、それとも失敗してしまったのだから、無駄な執筆をこれ以上避け、別の作品に力を注ぐべきか悩みました。 ソリデユスという作品で前回失敗したこともありましたし、私自身、物語を途中で終わらせてしまうのは、もったいないという気があるのですが、信条よりも大切なものは、読者の皆様に読んでいただき、楽しんでいただくことであると思います。 しかしながら今回の作品においては、楽しんでいただけないはずの展開にしていたにも関わらず、ご満足いただけていないようです。 そのため本作品を中身のない小説だと私は判断し、大変申し訳ございませんが、（あくまで私の主観ですので、お読みいただいている方への侮辱ではございません。ご安心ください。）執筆を中止させていただきます。 したがってしばらくの間は残しておきますが、めどが立ち次第、本作品を消去する予定です。

その代わりとして、時間はかかりますが新たな小説の枠組み作りに着手していくつもりです。 どうすれば読んで面白くなるのかを徹底的に考えていくつもりです。 本作品をお読みになってくださった方にはひたすら感謝の意と、お詫びを申し上げます。 よろしければ、今後もカーレンベルクの応援をぜひともお願いいたします。

第7章 会長のある悩み

隆平は彼女を止めると生徒会長の前に出た。

「お願いします。」

「ちよつと隆平。 やめなさいよ！ こんなやつに！」

頭を下げる隆平を見て、夕華は会長をにらみつける。

あの日の教師を見るような目で。

「この間冗談を言われた時は驚いたが、君は彼女と違って少しは骨がありそうだな。 いいだろう。」

それが人にものを頼む態度かと言われそうだったが、会長は夕華を相手にすらしていなかったようだ。

そのおかげでというわけでもないが、会長の口から信じられない言葉が出た。

ただし条件付きでという一言も一緒にだったが、一筋の光がさしたことには変わらない。

「なんだよ、条件って。 会長をナンパすりゃいいのか？」

「お前はホモか！」

荒山は潮田に数発頭を殴られた。

「れんちゃんは、ホモ・サピエンスなのですか？」

「ちげーよ！ あと、『れんちゃん』ってなんだよ！ 賭博に出
てきそうな呼び方だな。」

「れんちゃんはれんちゃんです。 いやなら、れんがじんしょうくつれっぱ連牙刃衝空裂破！
もありますか…」

律花はそう言って真顔で技名を叫び、太極拳のような構えをして
いる。

「前者と後者のギャップが激しすぎだわ、って今それどころじゃ
ないでしょ。」

夕華は話をもとにもどそうと、とりあえず怒りの感情は置いてお
くことにして会長にたずねた。

「で？ その条件って何なんですか？」

「うむ。 見てほしいものがある。」

会長は一度だけせき払いをすると、机の中から一枚の図を取り出
した。

「これって…」

「そう。 学校の全部活動名と、各部の状況をまとめた表だ。
そして君らにはここに注目してもらいたい。」

道谷の指の先には、
理工学部、部員数1
と書かれていた。

「まさか僕たちにこの部に入れと言いたいのかい？」

「そうじゃない。そうじゃないが、ただ…」

珍しいことに、周囲から恐れられているはずの会長がうなって何かを考えていた。

一体、この部のどこに良くない点があるのだろうか？

「ここには、その、一言で言えば変な奴がいる。本来ならば理工学部は去年の夏に廃部になっているはずだったんだ。あいつさえいなければ！」

次第に会長は怒りをありありと思い起こさせて机に手をついた。

「私たちにどうして欲しいの？」

「無論だ。この私が、どれだけ規律を重んじる人間か分かるだろう。その部室に居座り続ける変な奴を追い払え。もしそれができたら、代わりにそいつの使っていた部室を君たちに譲ろう。これで文句はないか？」

「それはいいけどよ。変な奴って、一体誰だ？ ビームを吐いたりするのか？」

「吐くわけないでしょ！」

夕華は思い切り荒山の髪を引っ張った。

「痛い！ てめえ女だろう？ 髪はもうちつと大事にしるよ。」

「お前はどうかんだよロン毛。」

潮田の言うとおり、男で髪を大切にするやつも珍しかった。

「れんちゃんの髪はロングヌスの槍でできているのですか？」

「んなわけあるか！ っていうか律花。なんで無駄にヘビー級な知識ばかりあんだよ。少しは常識ってものをだな。」

「そこまでだ。」

会長がポンポンと手を叩いてその場を鎮めた。

「常識がないのは君ら全員だ。こんなところで騒ぎ立てるものじゃない。場所を考えろ。後は、実際にそいつを見た方が早い。いいな。」

そして分かったらさっさと出ていくようにと会長は言った。

「会長。」

「なんだ木島君。まだ言い残したことがあるのか？」

「実は今会長自身、『ひゃっほー！』う今日もあの駄菓子屋でガチャガチャ千回やってやるぜーっ！ 巫女さんフィギュア当てるぜ

「――っ!」って思ってますん?」

「...。」

殴られた。

理工学部りこうがくぶの部室は理科室の横にくっついて、隠れ家のように小さな薄汚れたドアがその気味悪い存在を物語っていた。

「確かにここにあるとは聞いたが…」

荒山は理工学部りこうがくぶの部室を前にして、とんでもないところに来てしまったと身を縮めるようにして肩をこわばらせた。

「それにしても、本当に変な奴が出てきそうなところだな。」

潮田は周りを落ち着いた様子で見渡し、古ぼけた茶色い柵たなの中にあるアルコールランプをとった。

手で触ると、触れた部分にくっつきりと指の跡が残るほどひどくほこりがたまっていた。

「あんた、よく平気ね。　律花ちゃん、大丈夫?」

夕華が不安そうなおどおどとした調子で潮田の後ろに隠れながら言った。

「心配いりません。それよりもまずは自分を心配すべきではないのですか？ ゆーちゃんは今すぐにアトラスを召喚すべきです。」

アトラスを召喚することは不可能だが、とにかく進んでみないことには始まらない。

覚悟を決めたのか、くもったスモークガラスのそばにあった鍵をとり、隆平はドアにさしてみる。

錠前のはずれる音がした。

「開いたの？」

「ああ。僕が先に入るから、待ってて。」

「気をつけてね隆平。危なくなったら出てきてよ。」

「心配ないさ。」

ガッツポーズをとる隆平は夕華に見送られて中に入った、その時…

「ハーハッハッハッハッハー！」

聞いたことのない中年の男の声が、理科室のスピーカーから流れってきた。

「なんだ？ 一体何が始まるってんだ。」

そこにいた全員があとずさりして警戒する。

「隆平！」

夕華はそのとき恐怖を忘れて彼のもとへと走り、ドアを開けた。中は以外と広く、奥にはさらにもう一つ小部屋があるようだ。

「フハハハハハハハ！ こっちだよ夕華！」

「誰？ どうして私の名前を？」

「去年の英語の中間テストは五点だったよ！」

「つて、それってここで言うセリフ？」

彼女は悪寒を感じて引き返そうとしたが、今は隆平を助けなくてはいけない。

「隆平、出てきて！ いるんでしょ？」

だがいくら呼んでも返事はない。

彼は必死に隆平を探したが…

「お前かあああああ！」

いた。

彼は部屋のそばにあったテーブルの下に隠れて無線で声色を変えていた。

「痛っ！ わかった、わかったからやめてよ久野さん。」

「もう！ 本当に心配したのよ？ わかってんの？」

彼女はしばらく彼に当たっていたが、駆け付けた仲間を抑えられた。

「何事かと来てみれば、隆平。この学校でお前ほど人騒がせなやつはいないんじゃないのか？」

潮田はあきれ返って彼の無線機を手にとった。

だが、手に取ってみて彼のものではないことはすぐにわかった。

「確かに使ったのは僕だけど、まだ誰がいるかは突きとめていないよ。鍵がかかっていたことは留守か、あるいは職員がいるのに気づかず、鍵を閉めてしまったかだ。」

言われてみれば、床のいたるところに備蓄されたインスタント食品や、理工学部らしく、一通りの電化製品はそろっていた。

「いるのか、そこに…」

潮田は奥にあるもう一つの小部屋に目を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233l/>

普通じゃない生徒たちの密約と冒険～僕らは普通でないことが嬉しい～

2010年10月20日19時14分発行